

自己点検・評価報告書（医療保健学部）

基準2. 学生  
2-2 学修支援

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度 までの実績を踏まえた現状	自己評価 ( a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 )	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
<b>① 教員と職員等の協働をはじめとする学修支援体制の整備</b>				
教職協働による学生への学修支援に関する方針・計画・実施体制を適切に整備・運営しているか。	全学教育委員会、学生支援等連絡会など、学修支援にかかわる全学委員会や各学部教務委員会、学生委員会には、教員、事務職員の両方が出席して、意見交換・議論を行い教学にかかわる議論をしている。ボランティア体験、性感染症、ハラスメント防止などに関わる授業や学修支援センターの運営および次年度入学予定のA0試験入学や指定校推薦入学の学生に対する入学準備ガイダンスには、教員だけでなく、事務職員も大きく関与している。	a : 教員と事務職員が協働して学修支援を行う仕組みが確立しており、さらに発展させる。特に、新入学生における大学生活への早期の適応効果が認められる。	他の大学での成功事例を収集し、SD、FDの一環として共有することにより、教員と職員が協力して、学修支援にあたる。	-----
障がいのある学生への配慮を行っているか。また、具体的にどのような配慮をしているか。	平成26年度から平成30年度までに障がいを持つ学生が入学したことはない。松葉杖で歩行する学生は現に在学しているが、移動手段には特段の配慮を必要とする障がい度ではない。国家資格を必要とする学部であるため、今後も入学する可能性は極めて低いであろう。	-----	-----	-----
オフィスアワー制度を常勤・非常勤を問わず全学的に実施しているか。	すべての授業科目で、常勤、非常勤を問わず、シラバスにオフィスアワーの記入を義務付けている。	a : シラバス点検時に、よりオフィスアワーに注意して点検する。また、同科目担当教員が複数の場合は、各教員におけるオフィスアワーを認識しあっている。 b : オフィスアワーに教員を訪れる学生はそれほど多くない。	シラバスチェックの際に「メールで問い合わせること」といった記載があれば、確保している曜日・時間を具体的に記入するよう科目担当教員に求めることにする。	教員室のドアの掲示やデザインを工夫し、より学生が教員を訪問しやすくする。また、学生の訪問時間の効率化を図るため、教員は、授業時間内に質問等を収集し、その回答をMoodle上に掲示し、学生がいつでも閲覧できる環境を教員に向けて周知する。
中途退学者、休学者及び留年生への対応策を行っているか。	各学科ともに、退学者を未然に防ぐべく初年次からの成績不良者、欠席の多い学生等に対する教員間情報交換、定期的対策協議、父母への電話連絡・面談を行い、また定期的な父母面談会等により早期対応を図り、最善を尽くしている。	a : 中途退学率、休学率は過去5年間横ばいの状態であり、対応できている b : 今後、精神・心理的トラブルを有する学生への対応に学生相談室やカウンセリングなど総合的システム作りが必要である。	入学時点で偏差値が高く優秀で学修意欲の高い学生の入学率を上げる対策を講じる。また、Moodleを使用し、学業に対する質問を定期的実施する。	学修支援室の有効活用、カウンセリングシステムの構築など総合的対策が必要である。
<b>② TA等の活用をはじめとする学修支援の充実</b>				
教員の教育活動を支援するために、TAなどを適切に活用しているか。	実験科目、演習科目、大人数の授業科目などを中心にTAおよびSAを配置し、教員の監督下で、授業の補助を行っている。また、新入生ガイダンスにSAを配置し、同年代の学生の目線を運営に採り入れ、入学者が早期に大学生活へなじめるように工夫している。	a : 教員の目が行き届かない学生をTAやSAから連絡を受け、ほとんどの学生が授業に取り組める体制となっている。	授業を受けた学生からのアンケート調査を行い、その評価を行うこととする。	-----

自己点検・評価報告書（医療保健学部）

基準2. 学生  
2-3 キャリア支援

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度 までの実績を踏まえた現状	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
<b>① 教育課程内外を通じての社会的・職業的自立に関する支援体制の整備</b>				
インターンシップなどを含め、キャリア教育のための支援体制を整備しているか。	各学科ともに、低学年時の医療機関見学に加え、国家試験受験資格を得るために課された医療機関での実習等、卒業後の就業現場を意識したカリキュラムを組んでおり充実した支援体制が整備されている。	a : 医療機関の見学や実習等を充実させたことでキャリア形成の支援に役立っている。	低学年時におけるより広範なキャリア情報提供や、学外実習前に行う、より現場に近似した学内実習環境の整備を行う。	-----
就職・進学などに対する相談・助言体制を整備し、適切に運営しているか。	就職委員会がキャリアサポートセンターとともに企画する多様なキャリアサポートプログラムに加え、各学科それぞれが独自の就活支援体制を採っている。また、キャリアアドバイザーによる相談/指導等も充実しており、学生個々の希望に合わせた就活支援環境が整備されており、適切に運営されている。	a : 学部、学科、個人レベルでの支援・相談体制を整備することで、各学生の希望に沿った支援が実施できている。	各学科で就職先医療機関や企業が異なるだけでなく、就活時期にも相違があるため、更に各学科の特性に合わせた就活支援体制の整備を行なう。	-----
他大学のキャリア支援に関する取り組みなどを収集・分析し、キャリア支援体制の見直しなどに役立っているか。	必要に応じて他大学のキャリア支援体制を参考にしているが、就職実績から本学のキャリア支援体制は充実しており、大きな支援体制の見直しの必要性は低いと考えられる。	a : 他大学のキャリア支援体制も調査しているが、現状では独自の支援体制が効果を上げている。	各学科それぞれの就職先がバッティングするライバル校について、今後も必要に応じてキャリア支援状況の情報収集を継続する。	-----

自己点検・評価報告書（医療保健学部）

基準2. 学生  
2-4 学生サービス

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度 までの実績を踏まえた現状	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
<b>① 学生生活の安定のための支援</b>				
学生サービス、厚生補導のための組織を設置し、適切に機能させているか。	毎月開催している学生委員会でトラブルや対処ノウハウなどを共有するとともに、状況に応じて学務課や学生相談室と連携し対応している。	a : アドバイザー制度を活用し、学生の有意義な大学生活を支援できる指導体制が構築できた。 b : さらなるサポート体制の充実	トラブルシューティングに早めに対処するための情報蓄積、分析、活用の具体策を検討する。	学生の精神・心理・社会的な問題を類別し、全体を可視化できるシステム作りを行い、その上で適切なアドバイスを与える人的資源の確保を考える。
奨学金など学生に対する経済的な支援を適切に行っているか。	学生支援等連絡会で報告された内容をもとに奨学生を把握し指導に活用している。また、面談時に経済的な問題があると判断した場合は、学務課奨学金担当者と連携し問題を解決を図っている。	a : 各学科に在学する奨学生の情報を共有し、学務課奨学金担当者と連携した結果、大きな問題なく経過した。	奨学生の生活背景を鑑みた細やかな対応策の検討が必要である。	トラブルを生じる可能性のある学生の早期発見、早期対処・問題解決のシステム作りを検討する。
学生の課外活動への支援を適切に行っているか。	サークルを担当する顧問教員だけでなく、各学科の特色を生かした学外活動を企画し学生をサポートしている。また、かまた祭では街の保健室と称し、区民・地域住民の健康チェックを行い、継続的な地域貢献を担っている。	a : サークル活動、各学科の学外活動などが報告され、学生生活が充実した様子が伺えた。 b : 具体的な活動への参加度合、満足度調査等の詳細な実態把握が必要。	学外活動に参加する場を増やす工夫や参加学生を増やすこと、また社会生活に上手く対処できない学生を導くことの方策を考案したい。	学生の意見も取り入れ、教員・学務課との協働により、双方向の情報を集約し、対応策を検討する。
学生の心身に関する健康相談、心的支援、生活相談などを適切に行っているか。	学修支援室、カウンセラーを配備し、必要と思われる学生には自ら、または担当教員の紹介により相談する機会が与えられるシステムができた。活用する学生数も年々増えている。	a : 学修支援、カウンセリングシステムに着手できたこと b : 多様な学生に対し、よりの確に対応できるスタッフの割り出しが必要	学修支援室、カウンセラーの具体的な利用率を調査し、継続した学修支援システムを考えたい。	心理カウンセリングの他、精神疾患を有する学生への対策、学修障害等多様化する問題学生への総合的対策システムの構築が必要である。

自己点検・評価報告書（医療保健学部）

基準2. 学生  
2-6 学生の意見・要望への対応

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度までの実績を踏まえた現状	自己評価 〔 a：効果が上がった点 b：改善が必要な点 〕	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
<b>① 学修支援に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用</b>				
学生への学修支援に対する学生の意見などをくみ上げるシステムを適切に整備し、学修支援の体制改善に反映させているか。	授業アンケートを全科目で実施している。また、在学生調査を各学年(新2年生、新3年生、新4年生)で実施している。さらに学修支援センターでは学修の問題を抱える学生の相談に個別に乗ると同時に、学修支援センター指導員、学務課職員、教員による懇談会を年2回実施している。主要な建物に匿名でも投函可能な意見箱(Box for Best Care:BBCと命名)を設置し、学長室が直接開箱することにより、ハラスメントを含めた学修上の訴えを受け付け、必ず回答している。回答は、学生ポータルサイトに掲載している。また、日頃より学生からの意見を受けた教員は、各学科アゴラで情報提供を行い、必要に応じてその対策を講じている。	a：(1)2018年度より、授業アンケートおよび在学生調査の調査項目を見直し、データ取得方法を紙ベースからWebベースに変更した。 (2)学生からの意見に対する回答を当該学年全員に授業の初めあるいは終了時に行っている。 b：学修ポートフォリオの整備による学生自身による学修振り返りとその内容の教員による把握を進めることが必要である。	授業アンケートや在学生調査で取得したデータのIRセンターでの解析をすすめる。	学修ポートフォリオの何らかの形でのシステム化をおこない、学生自身が自己の学修内容を振り返りができるようにする。
<b>② 心身に関する健康相談、経済的支援をはじめとする学生生活に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用</b>				
学生生活に対する学生の意見などをくみ上げるシステムを適切に整備し、学生生活の改善に反映しているか。	フレゼミ面談、アドバイザー面談、保護者会、実習前面談などを通して意見などをくみ上げている。これらの意見については、各学科で対応するだけでなく学生委員会や学生支援等連絡会などを通して改善を図っている。 (ヘルスサポートセンターなど)	a：定期的に行っている学生へのアンケート調査、父母からのフィードバック等から特に指摘事項はなく、好ましい評価を得ている。	個々の要望、指摘事項、問題点を分析し、学部全体で解決できる方策を検討する。	専門家、識者を交えた議論を重ね、個々の事例に対応できる総合対策システム作りを検討する。
<b>③ 学修環境に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用</b>				
施設・設備に対する学生の意見などをくみ上げるシステムを適切に整備し、施設・設備の改善に反映しているか。	フレゼミ面談、アドバイザー面談、保護者会、実習前面談などを通して意見などをくみ上げている。施設・設備に関しては費用問題など発生する事案であるため、学部運営連絡会などで学部長を通して検討するようにしている。(学生用ロッカーの整備など)	a：学生用ロッカーの定期的入れ替えや施設・設備の保守点検、安全な運用に適切に取り組んでいる。学生からの要望に対し、学科から学部へと伝達され、適切に対処し、不満や指摘はあがっていない。	各種委員会から吸い上げられる問題点や検討事項を定期的に検討し、対策を立案する。また、学生、父母へのアンケート調査、学外からの識者を招いた学習会などをおし、本学に適した対応策を継続審議する。	-----

自己点検・評価報告書（医療保健学部）

基準3. 教育課程  
3-1 単位認定、卒業認定、修了認定

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度 までの実績を踏まえた現状	自己評価 a：効果が上がった点 b：改善が必要な点	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
<b>① 教育目的を踏まえたディプロマ・ポリシーの策定と周知</b>				
<b>①-1 教育目的を踏まえたディプロマ・ポリシーを定め、周知しているか。</b>				
各学部、研究科が定める教育研究上の目的を達成するための適切なディプロマ・ポリシーを定めているか。	大学全体で定める共通のディプロマポリシーを定めている。さらに、大学共通のディプロマポリシーに専門的能力を具体化した形で、学部ごとにディプロマポリシーを定めている。	----	----	----
ディプロマ・ポリシーをどのように公開しているか。また、その方法は適切か。	大学のウェブサイト、大学案内、学生便覧において公開しており、適切な公開方法である。	----	----	----
<b>② ディプロマ・ポリシーを踏まえた単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等の策定と周知</b>				
ディプロマ・ポリシーを踏まえた単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等を適切に定め、周知しているか。	各科目とディプロマポリシーに定めたラーニングアウトカムズの対応関係を示したカリキュラムマップを作成し、科目ごとの到達レベルをシラバスで記述している。2年から3年の進級要件および演習、臨地・臨床実習や卒業論文の着手要件を定め、学修状況に応じた科目履修を進めるとともに学修が困難な学生の早期の発見に努めている。卒業認定基準は所定の科目の履修によって認定しており、各科目で定めたラーニングアウトカムズとの対応の相対でディプロマポリシーを保証している。進級要件、卒業要件は、学生便覧に記載し、学生および教員に配布している。カリキュラムマップは、1年生に配布する履修案内およびウェブに掲載している。	a：進級要件および演習、臨地・臨床実習や卒業論文の着手要件の見直しを進めている。	進級要件および演習、臨地・臨床実習や卒業論文の着手要件について、進級率、卒業実績などのデータをもとに、継続的に見直しており、2019年入学者から新たな要件に見直した。	----
<b>③ 単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準の厳正な適用</b>				
単位認定基準、進級基準、卒業・修了基準を定めて、これを厳正に運用しているか。	各科目の単位認定にあたっては、シラバスに単位認定基準(成績評価基準)を明示し、各教員がシラバスに従った評価を行っている。シラバスが学生と教員との契約であるとの意識を、全学教育委員会を通じ、学部教務委員会、学部教授会で教員へたびたび周知している。卒業認定については、学部教務委員会および教授会において、それぞれ根拠資料を回覧し、厳正に運用している。	a：各学科内会議、学部教務委員会、教授会、学務課が相互にチェックしあいながら、厳正な基準の運用ができています。	教職員が高い意識を保ち、連携するための情報の共有と研修の充実を行う。	----
単位認定基準、卒業・修了基準を定めて、教育課程の編成・実施に反映させているか。	現状の教育上の問題点を学部教授会およびアゴラで確認することにより、現状カリキュラムの問題点を共有している。学術や社会の変化に加えて、各科目の単位取得状況、退学率、進級率をモニタリングすることによって、カリキュラムの継続的見直しを学部教務委員会が中心となり、4年に一度の頻度で行っており、その見直しの全学的な調整を全学教育委員会がおこなっている。	b：各分野の専門力育成のための授業は提供されているが、コンピテンシーの育成が十分にされているのか評価がされていない。	----	ラーニングアウトカムズのとくにコンピテンシーの定量化をすすめるとともに、コンピテンシーの育成により配慮したカリキュラム設計をすすめる。
単位認定など成績評価の公平性のためにどのような工夫をしているか。また、GPAなどをどのように活用しているか。	担当教員による判断のばらつきが出ないように、成績分布に関してガイドラインを設定し、全科目の成績分布を各学科内会議、教授会、学部運営連絡会もしくはアゴラで確認することにより、教員相互にチェックしあっている。GPAを算定し、成績表によって学生へ周知するとともに、GPAを単位の上限キャップの緩和、研究室の決定に活用している。	a：各学科内会議において教員相互にチェックを仕合い、厳正な基準の運用ができています。	----	----

自己点検・評価報告書（医療保健学部）

基準3. 教育課程  
3-2 教育課程及び教授方法

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度 までの実績を踏まえた現状	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
<b>① カリキュラム・ポリシーの策定と周知</b>				
各学部、研究科が定める教育研究上の目的を達成するための適切なカリキュラム・ポリシーを定めているか。	大学全体で定める共通のカリキュラムポリシーを定めている。さらに、大学共通のカリキュラムポリシーに専門分野を具体化した形で、学部のカリキュラムポリシーを定めている。特に、国家試験受験・合格に向けて教育課程表を編成し、実施している。	b : カリキュラムポリシーの設定はおこなったが、教育の現状をもとに、その継続的な見直しを議論していく。	-----	学修成果のモニタリングをもとに、カリキュラムポリシーが不変でよいかを不断に点検し、必要があれば見直していくことを検討する。
カリキュラム・ポリシーをどのように公開しているか。また、その方法は適切か。	大学のウェブサイト、大学案内、学生便覧において公開しており、適切な公開方法である。	-----	-----	-----
<b>② カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーとの一貫性</b>				
カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーの一貫性が確保されているか。	カリキュラムポリシーでは、全学部共通の6つのラーニングアウトカムズを育成するプログラムを定めており、このうち、専門力の部分に学部の特色があらわれている。ディプロマポリシーにおいても、6つのラーニングアウトカムズの達成を規定しており、両ポリシーは整合している。	a : 定期的な教員による授業点検における評点項目にも記載され、各教員への周知がなされている。	教員による評点と学生アンケートによる評価を照合させ、その乖離点などを点検し、見直しを検討する。	-----
<b>③ カリキュラム・ポリシーに沿った教育課程の体系的編成</b>				
カリキュラム・ポリシーに即した体系的な教育課程を編成し、実施しているか。	全学共通のカリキュラム上の特徴としては、フレッシュャーズゼミを1年次に配置し、少人数クラスによるクラス担任制と一体となった運営をしている。学部で提供する専門基礎科目、専門科目では、講義のほかに、実験科目、演習科目、臨地・臨床実習や卒業論文/卒業研究、学外実習などを効果的に配置している。	a : (1)2018年度よりフレッシュャーズゼミの3コマの授業を利用して5学科混合型の学生グループディスカッションを行い、他学科との連携の強化を行った。 (2) 国家試験合格率が良好で安定した成績となっている。	学生グループディスカッションから、さらにポスター発表まで混合型を推進することを検討する。	-----
シラバスを適切に整備しているか。また、作成にあたって第三者による検証を実施しているか。	シラバスは、全学で共通のものを教務システムから教員が記入する。シラバスが学生との契約である意識を徹底し、評価方法の具体的な記載、ラーニングアウトカムズとの対応、などまで含めて、記載内容を明確に教員に徹底している。書かれたシラバスは、学部の教務委員長が中心となり、記入者以外の教員がチェックし、また、事務職員も内容を確認している。	a : 教務委員長および事務職員による内容の確認を行うことで、不適正な内容が顕著に減少している。	-----	-----
<b>④ 教養教育の実施</b>				
教養教育を適切に実施しているか。	蒲田キャンパスの2学部では、学部ごとに教養教育カリキュラムを編成している。医療保健学部においても、外国語、自然、人文社会、ウェルネスの各科目群と社会人基礎科目の一部の企画、立案、実施を教養学環が担当しており、学部との調整を綿密に行っている。海外語学研修などの海外プログラム、スキー実習など特色ある科目も提供している。	a : 教養教育科目の各学部との連携の強化 b : 教養教育全体像の可視化と公開	従来より、教養教育科目の教育は学部との連携によって行われてきたが、今後も連携と自主性のバランスを保ちながら、教養教育を実施する。	同じ科目群内や異なる科目群間の関係ある科目間の関係をネットワーク図等で可視化し、教養教育全体や科目間関係の学生理解を深め、学修効果を深める。
教養教育を担当する組織の活動状況等を適切に把握しているか。	教養学環は、独自の教授会、独自の教務委員会を持ち、大学評議会、教育力強化委員会、企画推進委員会そのほかの全学の委員会に独自の委員を参加させている。また、学修支援センターの運営に大きく関与している。	a : 教養学環の組織の維持・活性化の促進 b : 教養教育の目的・目標の教養教員全体での共有と目標達成への協働の促進	新任教員を補充する際には、担当科目の専門性を有していることはもちろんのこと、各種の学外研修など多面的な教養教育活動を支えることができる教員を積極的に採用する。	2キャンパスや各科目群教員間の連携・情報共有が一層重要になってくるので、ICTを活用するなどして、活動状況・情報の可視化と教員間での共有を促進する。

自己点検・評価報告書（医療保健学部）

基準3. 教育課程  
3-2 教育課程及び教授方法

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度 までの実績を踏まえた現状	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
<b>⑤ 教授方法の工夫・開発と効果的な実施</b>				
アクティブ・ラーニングなど、学生の主体的な学びを促す授業内容・方法に工夫をしているか。	アクティブラーニング、反転授業、グループ学修、プロジェクトベースドラーニング(PBL)について、全教員が参加する全学教職員会でその手法を紹介し、授業ごとのこうした手法の活用の有無について、教員への授業方法アンケートでモニタリングしている。これらのうち、アクティブラーニングについては、教員による授業評価の評点項目としている。	a : 授業方法アンケートの教員への実施 b : 反転授業などを支えるインフラが動画配信など大容量配信には十分ではない。	授業方法アンケートを継続的に実施し、IRセンターにおいて結果の解析を行う。	反転授業などを支える大容量データを配信できるIT環境を整備し、反転授業の撮影など教材準備を行う部署を設置する。
教授方法の改善を進めるために組織体制を整備し、運用しているか。	教育力強化委員会を設置し、主として、教員による授業評価の実施および結果の報告、教員研修、学生による授業アンケートの集計、教員の各授業での成績分布のモニタリングとフィードバックなどの業務を担っている。	a : 教育力強化委員会を学長直属で設置し、学長室が事務補佐をしている。 b : (1) 授業アンケート結果や成績分布をもとにして授業の改善が十分ではない。 (2) 学外実習（臨地・臨床実習）において施設ごとの評価基準の設定が困難である。	教授方法、教育改善などに精通した事務職員の継続的育成と教育方法を専門とする教員の採用をおこない、教員に対する教育支援組織を整備する。	学生の授業評価、成績分布などを、学部教務委員会、教授会、アゴラなどで振り返り、その授業改善への利用が望まれる。学外実習における評価体制は、外部団体による調整が進んでいる。
履修登録単位数の上限の適切な設定など、単位制度の实质を保つための工夫が行われているか。	学期ごと24単位を履修上限とし、特別に成績優秀者に対して、28単位までの履修を認めている。15週の授業時間を講義曜日にかかわらず確保し、休講に対する補講期間を設けている。シラバスに準備学修の欄を設け学生の予習・復習内容を具体的に指示・明記している。実際の授業外学修時間を授業アンケートによってモニタリングしている。	a : 授業外学修時間のモニタリングを授業アンケートの中で開始した。 b : 15週の講義期間をとる場合、再試験と学外実習（臨地・臨床実習、ボランティアや海外語学研修など）の期間が重複する。	授業科目ごとに、授業外学修時間を十分に取れない理由の解析をすすめる。	八王子キャンパスにおいて、90分×15週の講義を100分×14週に改めることを検討している。

自己点検・評価報告書（医療保健学部）

基準3. 教育課程  
3-3 学修成果の点検・評価

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度までの実績を踏まえた現状	自己評価 〔 a：効果が上がった点 b：改善が必要な点 〕	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
<b>① 三つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価方法の確立とその運用</b>				
学生の学修状況・資格取得状況・就職状況の調査、学生の意識調査、就職先の企業アンケートなどにより、学修成果を点検・評価しているか。	学生の単位取得状況、進級率、卒業率、国家試験合格率については、事務局学務課、学部教授会、学部教務委員会においてデータをまとめている。就職率、就職先については事務局キャリアサポートセンターおよび学部就職委員会で評価している。入学時および年度初めガイダンス時に在学調査を実施し、その結果をIRセンターで解析の上、企画運営会議、学部教授会で報告している。	a：進級率、卒業率、国家試験合格率、就職率などの指標が取られ、在学調査が行われている。 b：学修成果の可視化において、現在、数値化している指標は取得単位数とGPAのみである。より学修内容が可視化されることが望ましい。また学生輩出先についても就職率以外により就職の質を表す指標が必要である。	進級率、卒業率、国家試験合格率、就職率、在学調査などの結果が、キャリアサポートセンター、学務課、法人の広報部などに分散しており、IRセンターでの一元管理、解析が望まれる。	ラーニングアウトカムズの各項目に対応する学修成果の可視化方法を確立する。コンピテンシーの客観試験による評価、卒業論文指導教員によるコンピテンシー評価などを実施する。また、学生の就職状況の質を評価する方法を検討していく。
<b>② 教育内容・方法及び学修指導等の改善へ向けての学修成果の点検・評価結果のフィードバック</b>				
学修成果の点検・評価の結果を教育内容・方法及び学修指導の改善にフィードバックしているか。	各学生の単位取得状況については、クラス担任が把握し、各学生と半年に一度面談することにより、学生にフィードバックしている。このときに把握した各学生の学修状況が教育内容・方法の改善に役立っている。国家試験を卒業時にほぼ全員が受験する学部においては、その試験合格のためのカリキュラムを組んでいるので、国家試験の合格状況が即カリキュラムの改善に役立っている。	a：クラス担任による面談による学生の学修状況の把握 b：カリキュラム改善がより客観的な指標に基づいて行われることが望まれる。	クラス担任による面談の継続的な実施および面談率の向上。	ラーニングアウトカムズの各項目に対応する学修成果の可視化方法の確立に合わせて、カリキュラム改善を科学的に検討する体制の整備とそれを支援する全学的な組織の整備が必要である。